

コロナ禍が収まることなく、不要不急の外出は控えるように国と都による指導が続いている。どこからどこまでが不要で不急なのか、線引きが曖昧なままに。お花見は不要不急のことに入る、常識的にはそうに決まっている。しかし花狂いにとって心の底からこのことに賛同する訳にはいかない、身体的にも心理的にも花の季節に家に留まるのははなはだよろしくないのだ。多少とも後ろめたさを感じつつ、今（2021年7月、国が4度目の「緊急事態宣言」を出した時に）、昨年から今年にわたる二春の花見について振り返ってみよう。なお、桜以外の花にも触れることにする。

2020年はコロナ禍の拡がりとともに花の季節を迎えることになった。毎年、寒桜が咲き始める2月半ばから遅咲きの八重桜が満開となる4月半ばまで、新宿御苑をしばしば訪ねてきた、まるで慣れ親しんでいる吾が庭を散歩するかのような感覚で。

この年は3月1日に初めて訪ねた。苑内にある個性的な3本の寒桜のうち、2本はすでに葉桜に、一本が満開になっており、見上げるとヒヨドリがせわしなく花をつついていた。

驚いたのは、いつも春分の日頃に満開となるハクモクレンがすでに沢山の純白の花を咲かせていたこと。10日後には満開になっていた。この時には早咲きのヤマザクラ、糸桜（しろっぽい花をつけるベニシダレの変種）、小彼岸などがちらほら咲いていた。

3月21日に訪ねた折には、染井吉野が7、8分咲きに。小さめの可愛い花を咲かせる小彼岸の樹は、主幹が枯れたらしく貧相な枝振りに、これでは長くはもつまい。1本しかないエドヒガン（染井吉野の母親に当たる）は満開になっていた。

春風に吹かれながら広い苑内をぶらぶら歩くのは実に気分がよろしい、うるさく喧伝されている三密を避けるにはもってこいだ、例年ペチャクチャ声高にしゃべりマナーもよくない人たちもいない、また来ようとのんきに構えていた。

この頃、正月早々に予定を組んだ京都～伊勢をまわる家族旅行をどうしようか悩んでいた。孫は「おじいちゃん次第」という。たまたま数日前に京都に行ってきたという人に遭って話を聞いたところ、外国人は来ていないしどこも空いていたとのこと。決行することにした。

3月26日往きの新幹線はガラガラだった。京都に着いて一休みし、まず訪ねたのが桂離宮、自分として確かめておきたいことがあったし、娘と孫にぜひともそこを案内しておきたかった。1時からの参観に参加者は20人ほど、いつもの半数ほどか。うららかな春日で心も浮き浮き、ところどころで案内人の説明に補足して孫たちに知っていることを話す。園林

堂前に架かる太鼓橋を渡るとヤマザクラが2本あり、少ないながら花を咲かせていた。根元には見慣れた雪見灯籠、心なし小さく見える。池をはさんで建つ笑意軒の前には、ベニシダレが見事な花を付けており、まわりの風景を引き立てているかのよう。ちなみに、離宮内に染井吉野は植えられていない。

阪急京都本線の桂駅に戻り、先にホテルに行くという家内と分かれて3人で嵐山に、人が疎らな公園を通り抜け、渡月橋をのんびりと渡ることができた。こんなことは初めての経験かもしれない。折から西日が斜めに嵐山を照らし、ヤマザクラが点々と浮かび上がっているかのよう。元気な二人は天龍寺を目指してすたすたと歩いて行く、こちらはよたよたしながら懸命について行く。ついに門前でダウン、二人を見送り、腰を下ろしてしばし休憩。しかし帰る訳にはゆかない、意を鼓して天龍寺庭園に、祥雲閣前にある数本の見事なベニシダレに数年ぶりに出あう。花はまさに満開、樹冠に夕日が射してえもいわれぬ艶めかしい姿をあらわしていた。

青蓮院近くで夕食をとった後、ゆったりとした坂をぶらぶら歩いて円山公園に、人出がほとんどなく、あたりは薄暗い。名高い祇園の枝垂桜はライトアップされていた。10年くらい前のこと、枝が2、3か所切られてみじめな姿になっている枝垂桜を目にした時には、愕然とした覚えがある。今回は、驚いたことに、高く土盛りされている老木の周りに数本のベニシダレが植えられており、まるで厚化粧して醜態を隠しているかのようになっていた。辺りに人々がまばらに、こんなに人気のない風景は、またと見られないだろう。

翌日は一転して小雨の天気、私たち以外は乗っていない車両で伊勢に移動した。この日、(金曜)都知事が週末には不要不急の外出を控えるようにとのお達しを出した。これに応じて娘の勤めている会社も社員に都の意向を伝えたようだ、娘と孫(伊勢行きを提案した本人)は昼食後に帰ってしまった。二人で鳥羽に泊り、翌日土曜に何事もなかったかのように帰京した。その数日後、緊急事態宣言が発出された。これに伴い新宿御苑や都立の公園が閉鎖されるとは、思ってもみなかった。

11月末に修学院離宮の参観と西芳寺の拝観を申し込んで許可証を得ていたものの、コロナ禍の拡大していくなかで気が上がり、中止した。思えば花見の時ほど力が出なかったのだ。

2021年3月、コロナ禍第3波のピークは過ぎたものの新たな感染者の高止まりが続く。染井吉野の開花は例年になく早かった。近所の桜は24日には満開に、例年とは何年頃を指すのかよく分からないが、近年では桜の開花が早めになっていることは確かだ。

新宿御苑は事前予約制で開放されるようになったことを知り、パソコンを通して予約をとった。指定の26日10時少し前千駄ヶ谷門に、すでに行列ができていた。係のお兄さんに

控えてきた予約番号を見せると、すんなり通してくれた。苑内では染井吉野が満開になっていた。御苑に来る度に見に行く八重左近桜は、主な幹が枯れたらしく切られており、脇に伸びる一枝に沢山の花が咲いていた。これは早晩枯れるだろう。

4月2日10時入苑の予約もとれた。ところが入口でトラブルに、係のお兄さんが予約番号の控えだけでは入れないという。前は入れてもらえたと言主張してもらちが明かない。集まってくる人たちはスマホを見せながらすいすいと入場してゆく。引き返す訳にはゆかない、しばらくねばることにした。係が時折スマホを取り出してはつぶやいている。待つことおよそ20分、確認がとれました、ということでようやく入苑することができた。4月上旬だというのに、遅咲きの八重桜（関山や普賢象など）が咲き誇っている。日本庭園奥にある駿河台句も満開に、丁度顔の高さに花をつけている枝が伸びていたの、いつもしてきたように匂いを嗅いでみる。ところが匂いがしない。近くで別の桜の匂いをかいだのだから嗅覚がおかしくなっている訳ではあるまい、咲き初めには香りが強い花も、もうピークが過ぎてしまったのだろう。苑内で最も美しい樹形をとっている福祿寿の大木は、5分咲きほど。ここから緑の広がる芝生の広場を横切り、最も遅く花を咲かせる品種の一つ簪（かんざし）桜を目指す。もうちらほらと咲いているのを確かめて、これで今年の桜は終わりだと感慨にふけた。一方で何か物足りなさを感じていた。毎年出かけていた千鳥ヶ淵～代官町通にも六義園にも二春続けて出かけていない。そうだ、東北がある、ととっさに思いついた。

4月22日、東北新幹線に乗っていた。車両内はいくばくの席もうまっていない。ここに到達するまでは気を使った。コロナ禍は収まっておらず、連日数百人の新規陽性者が出ていた。前日まで1000人を超えるようだったら中止しようと思っていたのだが、そこまでは達しなかった。当日東京駅まで出る際には十分に気を付けたつもりだ、これにはウイルスの性状を知った上での働も働かせる必要がある。あれこれ思い出すと、一瞬列車に乗っているのが夢の中のような錯覚に襲われた。外は快晴、那須に始まって栗駒まで、遠くにあるいは近くに、雪を被った山々の風景が次々と出てくる。2時間11分で盛岡に、途中下車してランチをとった。ここも東京と変わらず、コロナ対策をしっかりとっている。北上川に架かる橋の上から岩手山の姿がくっきりと望めた。当地の桜について案内所で尋ねると、もう終わったとのこと、市内見物は止め、休憩をとった後に角館に向かった。

武家屋敷が連なる通りは、枝垂桜が丁度見頃だった。写真を見て想像していたとおり、この枝垂桜は全体的に花の付き具合があまりよくない。歩いている人は多くないが、交通整理をしていたおじさんによると、今日は今までで一番人出が多いとか。川辺の桜並木を覗くとかなりの人たちが花見を楽しんでいる様子だった。入場料を払って武家屋敷の一つ青柳家を見学、広い屋敷の中庭に背の高い枝垂桜が咲いていて、脇の看板に「あおやぎしだれ」と

呼ばれようになった由来が書いてあった。小さな池のほとりでカタクリ、ニリンソウ、キクザキイチゲなど、スプリング・エフェーメラル（春の妖精群）と呼ばれている花々に出あう。最後に屋敷内の近代的なカフェで一服し、また武家屋敷通りに出てぶらぶら散策した。

翌日早朝に盛岡を発って弘前へ、約 1 時間半の行程だ。朝から好天に恵まれ、弘前に近づくとつれて山頂の白い岩木山の全貌が見えてきた。三度目にして初めての風景だ。弘前公園（弘前城跡）は桜がまさに満開になったばかりで、堀に花筏が見られない。東門から公園に入り、さらにすすんで直角に曲がって東内門をくぐると、染井吉野として日本で最も古いとされている樹齢 130 年余の桜に突き当たる。樹は今年もびっしりと花に覆われていた。下乗橋を渡って本丸に、石垣上の弘前枝垂が美しく着飾って歓迎してくれているかのよう。本丸内は人がまばら、天守閣、石垣、花付きの良い枝垂桜と染井吉野の古木、松の木、岩木山、これらの組み合わせがここを日本有数の桜の名所に仕立て上げていることがとくと観察できた。おぼつかない脚を鼓舞し、天守閣に登ってみた。展示物を見る余裕がなく、梯子のような階段をひたすら登り、狭い所で柱に掴まりながら桜を見下ろし、手摺りを命綱にして階段をおそるおそる降りる。こんな経験をするにはもうあるまい。桜並木にまわると、思いのほか多くの人が歩いていた。関西系旅行業者の旗を持つガイドを先頭に、20 人くらいの人たちが足早に通り過ぎて行った。今回見かけた唯一の団体旅行者だ。のんびり歩いて天守閣につながる橋に戻り、石垣の上の弘前枝垂に別れを告げた。

帰ってから 2 日後に緊急事態宣言が発出された。危ない目に遭った訳ではないと思うものの、複数県をまたいでのきわどい旅ではあった。

コロナ禍第 3 波が続く中、よく出掛けている神代植物公園はじめ都立公園は軒並み閉鎖されたまま、6 月になってようやく日指定の予約制により開放されることになった。6 月 8 日神代植物公園見学の予約をとり、許可証のコピーを持参して難なく入園、まずは気になる神代曙桜の樹を見に行った。ここ 20 年の間に樹が大きくなっている印象はなく、枝の一部が切られ、幹がそれとなく老化してきている様子だ。去年は美しい花を咲かせていたのだが、この先どうなるかおぼつかない状態のように見受けられた。道をはさんで広がる桜園には若木が 3 本すくすくと伸びている。原木のような風格が出るまであと 2、30 年かかるだろう。この日の思いがけない収穫は、マグノリア園で泰山木の大きな花を間近に見て、抹香臭い香りを嗅ぐことができたこと。

深大寺門から出て敷石の参道を抜け、水生植物園に向かう。花菖蒲が見られるはずだ、都内の菖蒲園に出かける代わりにせめてここで見ておこうと思う。広くはない一角に数品種の花が咲いていた。もうピークが過ぎているのだろう、花からみずみずしさが失われているよ

うに感じた。

かくして2年にわたる花を求める放浪は終わった。来年はどうなるだろうか、体力勝負になることは避けられないと自覚しつつ、早くもよい花との出会いに期待する気持ちになっている。これが花狂いの心理というものだろう。